

平成24年3月13日

平成23年度（第62回）芸術選奨文部科学大臣賞 及び同新人賞の決定について

文化庁では、昭和25年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績をあげた方、または新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞をおくっています。このたび、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

1. 趣旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

2. 部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論等、メディア芸術の11部門にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には30万円、新人賞には20万円の賞金が贈られます。

3. 贈呈式

3月19日（月）午後5時から、合同庁舎7号館東館3階講堂（東京都千代田区霞が関3-2-2）において行います。なお、贈呈式での取材は可能です。

※取材を希望される場合には、事前登録をお願いします。下記の担当までご連絡ください。

＜担当＞文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室
芸術文化課長 舟橋 徹（内線 2822）
活動奨励係長 市橋 義史（内線 2832）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-2835（夜間直通）

平成23年度(第62回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞:19名 文部科学大臣新人賞:11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	くりやま たみや 栗山 民也	演出家	「ピアフ」他の演出
		なかむら またごろう 中村 又五郎	歌舞伎俳優	すがわらでんじゅてならいかのみ 「菅原伝授手習鑑」の演技
	新人賞	いまい とむひこ 今井 朋彦	俳優	「破産した男」他の演技
映画	大臣賞	しんどう じろう 新藤 次郎	プロデューサー	「一枚のハガキ」の製作
		なるしま いずる 成島 出	映画監督	「八日目の蟬」他の成果
	新人賞	すなだ まみ 砂田 麻美	映画監督	「エンディングノート」の成果
音楽	大臣賞	かめやま こうの 亀山 香能	箏曲演奏家	「第16回 亀山香能箏曲リサイタル」の演奏
		ふくだ しんいち 福田 進一	ギター演奏家	「福田進一ギターリサイタル」の演奏
	新人賞	かわむら ひさこ 河村 尚子	ピアノ演奏家	「東京オペラシティリサイタルシリーズ B→C 131」の演奏
舞踊	大臣賞	しゅどう やすゆき 首藤 康之	ダンサー	「Shakespeare THE SONNETS」の成果
		はなやぎ じゅらく 花柳 寿楽	日本舞踊家	「夢殿」の演技
	新人賞	ゆかわ まみこ 湯川 麻美子	バレエダンサー	「パゴダの王子」における女王エピソードの演技
文学	大臣賞	こいけ まりこ 小池 真理子	小説家	いちじく 「無花果の森」の成果
		ふじい さだかず 藤井 貞和	詩人	はるこれ 「春楡の木」の成果
	新人賞	うめない みかこ 梅内 美華子	歌人	「エクウス」の成果
美術	大臣賞	はたけやまなおや 富山 直哉	写真家	「Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」展の成果
		ばん しげる 坂 茂	建築家	東日本大震災被災地等で活用された「紙の建築」の表現
	新人賞	おだに もとひこ 小谷 元彦	美術家・彫刻家	「幽体の知覚」展の成果
放送	大臣賞	あぶの かつひこ 阿武野 勝彦	プロデューサー	ドキュメンタリー「死刑弁護人」の制作
	新人賞	さかもと ゆうじ 坂元 裕二	脚本家	ドラマ「それでも、生きてゆく」他の脚本
大衆芸能	大臣賞	やなぎや ごんたろう 柳家 権太楼	落語家	「柳家権太楼独演会」他の成果
		ゆき さおり 由紀 さおり	歌手	アルバム「1969」の成果
	新人賞	サキタハヂメ	のこぎり演奏家・作曲家	アルバム「SAW much in LOVE」他の成果
芸術振興	大臣賞	おおとも よしひで 大友 良英	音楽家・プロデューサー	「プロジェクトFUKUSHIMA！」の活動
	新人賞	かい けんじ 甲斐 賢治	せんだいメディアテーク 主幹兼企画・活動支援室長	「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の活動
評論等	大臣賞	すずき ときこ 鈴木 杜幾子	美術史学者	「フランス革命の身体表象 ジェンダーからみた200年の遺産」の成果
		なかむら てつろう 中村 哲郎	演劇研究者	「花とフォルムと 転換する時代の歌舞伎評論」の成果
	新人賞	さとう もりひろ 佐藤 守弘	視覚文化研究者	「トポグラフィの日本近代 江戸泥絵・横浜写真・芸術写真」の成果
メディア芸術	大臣賞	さとう まさひこ 佐藤 雅彦	東京藝術大学教授	TV番組「0655」「2355」他の成果
	新人賞	ながい たつゆき 長井 龍雪	アニメーション監督	「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」の成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成23年度(第62回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

平成23年度(第62回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	栗山 民也	栗山民也氏は現代演劇界を代表する演出家として、これまでも数多くの優れた舞台を創ってきた。平成23年には井上ひさし作「日本人のへそ」(こまつ座)、同「雨」(新国立劇場)、パム・ジェムス作「ピアフ」(シアタークリエ)という、タイプの違った三作品を三劇場で演出し、それぞれの作品の持つ魅力を出演者の個性を生かしながらか見事に造形した。三つの舞台は平成23年の日本の演劇界の大きな収穫になった。
演劇	中村 又五郎	9月、新橋演舞場での三代目襲名披露で、義太夫狂言の名作「菅原伝授手習鑑」から「寺子屋」の武部源蔵と荒事の基本「車引」の梅王丸を演じ分けて、芸域の広さを見せた。殊に初役の源蔵は、物思いにふける花道の出から、中村吉右衛門氏の松王丸に対峙して一步も譲らない首実検まで、その立場、境遇、人柄までが鮮明な源蔵だった。踊りにも定評がある働き盛りの50代。時代物に定評がある人間国宝の吉右衛門傘下にあつて芝居に厚みを増す役者としての存在は大きい。
映画	新藤 次郎	新藤次郎氏のプロデュース作品「一枚のハガキ」は、今年度観客が最も感動を受けた作品であった。戦争に翻弄させられる人々の悲しみと、人間の生き抜く力を、兵士として従軍した99歳の監督が描ききった渾身の作品は、氏のプロデューサーとしての企画、準備から撮影、仕上げ、配給、宣伝、興行までの全過程を丁寧に組み上げ、ハンドリングした成果であると高く評価できる。独立プロや製作委員会が映画制作の主体となっている現在は、作品の興行をも含めた全運行はプロデューサーの手に委ねられてきている。今までも増して、これから世界に翔く作品創作をも担ってくれることを期待する。
映画	成島 出	映画監督・成島出氏はここ数年話題作を多く提供している。同氏の監督作品「八日目の蟬」(原作は角田光代の同名ベストセラー小説)は、現代の児童誘拐を扱った2時間半におよぶミステリー作品である。この作品が何より魅力的なのは、母性を普遍的なテーマとして捉え、オーソドックスな手法で日本的作品に仕上げ、観るものの心を掴み取ったところにある。その手腕は見事である。氏はこの作品に登場する女優たちのキャラクターに鋭い眼を配り、女の性、悲しみをきめ細かく描出した。その演出力は実にたくみである。また小豆島での人間と自然の関係も印象深く描かれ、魂の作品として仕上げている。その技量を高く評価したい。
音楽	亀山 香能	亀山香能氏は、山田流の歌・箏・三絃の伝統的な技法の上に立って、現代的な平明でさわやかな感覚を吹き込んだ演奏を展開してきた。昨年のリサイタルにおいては、中能島欣一作曲の「赤壁の賦」では、若い尺八演奏家と箏で共演して、曲の新しい魅力をひきだしたり、中能島松声作曲の「雨夜の月」では、六人の箏の演奏家に囲まれて一人で三絃を弾き、ひき締まった演奏で新しい歌の魅力を生みだした。
音楽	福田 進一	福田進一氏は、パリ国際ギターコンクールで栄冠を勝ち取って以来、今日に至る30年の間、傑出した演奏、教育活動を世界的規模で続けてきた。その福田氏が、コンクール優勝30周年を期して始めたバツハの無伴奏作品を全曲ギターで演奏するという企画の初回(無伴奏チェロ組曲)で示した演奏は、作品の構造と奥深い精神性を見事に明らかにするもので、改めて氏の、技の熟練度の高さやギターを越えた音楽そのものに対する深い理解を目の当たりにさせた。わが国におけるギター音楽の存在感を高めた功績は極めて高く評価できる。
舞踊	首藤 康之	「Shakespeare THE SONNETS」において、劇作家その人を思わせる詩人、恋のライバルである美青年、劇中人物のオセロ、ロミオなど複数の役柄を演じ分け、また融合して奥の深い人間観を表現した。女性パートを踊った中村恩恵氏による高度な振付を見事に具現するいっぽう構成・演出をも担当し、16世紀的であると同時にきわめて現代的でもある哲学的な内面世界をたぐい稀な緊張感と官能性をもって創出したのは、本年度最大の成果の一つである。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	花柳 寿楽	花柳寿楽氏は正統的な技法を土台に修練を重ね、前名の錦之輔時代から端正で品格ある芸風が常に注目を浴びてきた。近年は特に表現力に一層の磨きがかかり、「花柳寿楽舞踊會」における「夢殿」から醸し出す静謐さは多くの人を魅了した。「夢殿」は三世花柳壽輔の名品として知られるが、元は二世壽輔(壽應)の振付(昭和6年初演、昭和25年改訂上演)で、今回は改訂版の蘇演(四世壽輔補綴)。夢殿に象徴される精神性を舞踊技術だけで表現する「舞踊の純粋性」を追求した壽應の志を氏は高い芸術性で上演した。
文学	小池 真理子	「無花果の森」は、夫の暴力に耐えかね、生きることに絶望して出奔した女と、冤罪から逃れて身を隠す男の、廃市とも呼べる地方都市での出会いと愛執を通して、現代の隠棲文学とも呼べる悲しさ、美しさ、そしてたたかさを表現している。小池真理子氏はミステリー文学から出発し、人間関係のサスペンス性で物語を創ってきたが、本書では登場人物を絞り込み陰影をつけ、社会的弱者の苦悩に真正面から向き合い、再生の力強さまでを描ききっている。
文学	藤井 貞和	藤井貞和氏は詩人・国文学者で、多数の詩集の他、「古日本文学発生論」などの論考がある。豊かな知見に裏打ちされたその詩は、神話性と現代、荘重と軽み、ことばの冒険とひたむきに歌う「いのち」など、相反する要素の魅力的な衝突現場といっている。現代文明に対する痛切な思いも、洗練されたことばの中に込められている。詩人は早くから詩のかたちや方法、ことばのひびきに意識的であり、本詩集は新しい詩を模索する中で生まれた貴重な成果である。
美術	畠山 直哉	畠山直哉氏の「畠山直哉展 Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」(東京都写真美術館)は、同氏が1980年代以来積み上げてきた、自然と人間の営みとの関わり合いを緻密に撮影し、再構築していく作品群を集大成したもので、日本の写真表現の展開において一つのエポックとなった。とりわけ、そこで展示された新作の「陸前高田」と「気仙川」の両シリーズは、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市で生まれ育った氏にとって重い意味を持つ作品であり、注目に値する。
美術	坂 茂	坂茂氏の「紙の建築」は、紙製のパイプを組み合わせることによって低廉で自由な建築構造を手に入れるものであり、平成12年のハノーバー万国博覧会日本パビリオン(独)、平成22年のポンピドゥ・センター、メス(仏)などに結実して来た。平成23年の東日本大震災に際しては、このシステムを応用して避難所用簡易間仕切りを作り、支援に貢献した。「紙の建築」による同氏の創造性は、方法と造形の両面において高く評価される。
放送	阿武野 勝彦	阿武野勝彦氏はプロデューサーとして「裁判長のお弁当」「光と影～光市母子殺害事件 弁護団の300日～」と、継続して司法のあり方を鋭く問い続けて来た。司法シリーズの8作目となる最新作「死刑弁護人」では死刑制度やそれを巡る報道について一石を投じた。また四日市公害、戸塚ヨットスクールなど忘れ去られようとする社会問題にも目を向け、優れたドキュメンタリーとして結実させた。その信念ある姿勢を高く評価したい。
大衆芸能	柳家 権太楼	落語家・柳家権太楼氏は、柳家の太い柱である滑稽噺を軸に、人情噺まで幅広い芸風を開拓してきた。近年は池袋演芸場に於ける「日曜朝のおさらい会」を中心に演目を研磨鍛錬、その成果は毎年晩秋の上野・鈴木演芸場、年数回に及ぶ横浜にぎわい座での「柳家権太楼独演会」などに顕著である。得意演目とも言える「代書屋」「井戸の茶碗」「笠碁」「くしゃみ講釈」「火焰太鼓」なども、その時々に応じた臨機応変のマクラで、新たな光を当てて口演。さらに、多くの演者が挑み続ける「芝浜」では、「権太楼の芝浜」とまで言われる境地を切り開いた。その実りある成果に対するの評価である。

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	由紀 さおり	由紀さおり氏が米国のオーケストラ「ピンク・マルティーニ」と組んで、1969年のデビュー曲「夜明けのスキャット」ほか同時期に内外でヒットした曲を歌ったアルバム「1969」が異例の世界的成功を収めたことは、久々に本邦音楽界に明るい話題を提供した。ほぼ全曲を日本語で歌ったアルバムが海外でも高く評価されたのは、高度に洗練された歌唱、40年に及ぶ歌手活動で培った豊かな表現力の賜物で、CD盤発売に合わせた欧米公演でも日本語の魅力を歌に托して賞賛を浴びるなど、「1969」は大衆歌謡の世界に新たな地平を切り開く顕著な成果となった。
芸術振興	大友 良英	大友良英氏は音楽の多様なあり方を提案し続けてきた。大震災を受けて、故郷福島で「ポジティブな未来像」を描き、福島から新たな文化を創造するために、地元の人々の協力と多彩な芸術家との連携で、「プロジェクトFUKUSHIMA！」を立ち上げ、さまざまな芸術活動を展開した。ありのままの福島が世界中の注目を集め、福島の人々に勇気を与えた。震災復興の芸術活動の中でも出色であり、福島の人々を力づける活動として、多大の寄与を為した。
評論等	鈴木 杜幾子	鈴木杜幾子氏は著書「フランス革命の身体表象—ジェンダーからみた200年の遺産」において、フランス革命に関連する視覚文化を絵画からカリカチュアまで多岐にわたって取り上げ、それらの身体表現を中核として論じている。その身体論の展開において、氏は従来の古典的な「理想美」に代表される西欧の男性中心的な視座を相対化し、ひとりの日本女性としてのジェンダー論的な視座を確立している。その意味でフランス革命の文化史へのユニークな貢献と評価できる。
評論等	中村 哲郎	「花とフォルムと 転換する時代の歌舞伎評論」は、中村哲郎氏の1970年代から現在に及ぶ40年間の歌舞伎評論を集成したもので、質量ともに充実して分厚い。時代を同じうした歌右衛門を始めとする多彩な俳優の論は、切々たる愛憎に満ちて感動的であり、三島由紀夫や井伏鱒二、郡司正勝らに及ぶ人物評も深く重みがある。昭和歌舞伎の歴史と同化する氏は、歌舞伎芸の本質を「花」と「型(フォルム)」の合一に求めた。構成の妙もあって審査員間の圧倒的な支持を得ての受賞である。
メディア芸術	佐藤 雅彦	佐藤雅彦氏の作品群は、メディア芸術の新しい地平を、独自の視点と方法論で切り開くものである。テレビ番組「0655」、「2355」は、メディアクリエイターの視点で、テレビメディアの新しいあり方を追求している。それは、視聴者が生活のリズムを刻む為の役割としてのテレビ番組で、朝「0655」でその日一日の始まりのリズムを、そして「2355」ではその日の終わり、つまり睡眠へ誘うリズムを刻むテレビ番組という役割を見事に表現しえたものとなった。このユニークで高度な放送メディアでのメディアデザインとコンテンツ制作を行ったことが今回の評価となった。

平成23年度(第62回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	今井 朋彦	研ぎ澄まされた演技には早くから注目されていた。今回はフランスの若手現代劇作家として、今最も注目されるダヴィッド・レスコの作品「破産した男」において、抽象性のある膨大な戯曲言語をイメージ豊かに伝えた。すべての所有物を奪われてゆく男を時にユーモラスな動きを交えて表現、それは「所有」観念への批評であり、都会に潜む人間の孤独をも滲ませた。知的人物を演じられる俳優として今後も期待される貴重な演技者である。
映画	砂田 麻美	ガン告知を受けた父の死に行く姿を映像に写しとる「エンディングノート」で映画監督としてのスタートを切った砂田麻美氏は、肉親の死、という客観的になりにくい題材を真っ直ぐな視線でとらえ、普遍性を持つドキュメンタリー映画に仕立てあげた。そこにある冷静さと人間らしい暖かみには良き映画作家としての資質が垣間見られ、今後が期待される。これを第一歩として、これからも人間味を忘れず、映画に新たな明日を迎えるための力になることを目指していただきたい。
音楽	河村 尚子	河村尚子氏は近年希な大型新人として、デビュー以来、古典派・ロマン派のピアノ作品に感性豊かで瑞々しい演奏を行ってきた。演奏会、録音のどれもが完成度の高いものであったが、東京オペラシティリサイタルホールで行われた「B→C」では、そうした実績に溺れることなく、現代作品の新たなレパートリーに挑み、この分野でも他の追従を許さないほどのニュアンス豊かで美しい演奏を達成した。今後もさらなる高みに駆け上ることだろう。
舞踊	湯川 麻美子	新国立劇場開場時に同バレエ団入団以来、様々な作品で主要な役を任されてきた。高度な技術に加えて豊かな表現力を持つ、いわゆる「女優バレリーナ」。平成23年、同バレエ団プリンシパルに昇格。シーズン開幕のピントレー振付「パゴダの王子」世界初演で、妖艶な悪女、女王エピソードを演じ、圧倒的な存在感を示すと同時に舞台全体を引き締めた。ドラマティックで洗練された演技ができる貴重な人材。さらなる活躍が期待される。
文学	梅内 美華子	同志社大学在学中から作歌し、馬場あき子氏に師事。平成3年に角川短歌賞を受賞し、みずみずしい恋愛の歌が注目された。「われよりもしずかに眠るその胸にテニスボールをころがしてみる」が話題となった歌人。新鮮な感受性が深まり、この第5歌集に至って、身体感覚の詩的表現が結実する。「コブラから猫へ杖へと擬態してニンゲンにもどるときを怖るる」は、ヨガの歌で、人間として存在する脅えをつかむ。「犬蓼も二歳の馬の鼻先も短くて惜しむ秋のはじまり」なども、郷土青森に関わる歌で、失われながら残りゆくものを愛惜してやまない。
美術	小谷 元彦	現代人がそこはかとなく感じている不安や恐れなどを、気配として捉え、顕在化するという主題に小谷元彦氏は取り組んでいる。平成12年に入って活発な表現活動を見せている同氏の創作の集大成ともいえる展覧会が国内の4美術館で平成22年から24年まで開催され、若い人々の間に強い共感の波動を生んだ。「幽体の知覚」と題されるこの展覧会で、氏は写真、映像など多様なメディアを駆使した作品のそれぞれから観る人が強いインパクトを受けることを期し、それに成功している。伝統的な彫刻を学んだ造形力を基礎に潜在意識や心理のひだに切り込んでいく力量と思索の方向に期待が寄せられる。
放送	坂元 裕二	現代を独創的に描くという作家性は貴重である。脚本家・坂元裕二氏はその独創を自然体で描き切れる作家である。「それでも、生きてゆく」では殺人事件の被害者の家族と被害者の家族が、男として、あるいは女としてどう交際できるのかという設定、「さよならぼくたちのようちえん」では、重い病の友に会うために親から離れ、許しもなくはるかなる旅に出かけてしまう、幼稚園の自立したこどもたちという設定を創り、その設定の中で、新しい意識を持つ現代的人間像を繊細に描ききっている。氏のせりふと心理描写は俳優を見事に動かしていく。

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	サキタハヂメ	<p>西洋のこぎりに弦を当て、バイオリンにも劣らぬ世界を醸すサキタハヂメ氏のアルバム「SAW much in LOVE」は秀逸である。澄んだ音色とともに愛と癒し、温もりがメッセージとして伝わる。演奏会のための「のこぎり協奏曲」、テレビ番組「シャキーン!」「妖怪人間ベム」で担当する音楽に聴く、作曲・編曲・演奏家としての資質が花開いた。子供相手のライブでは“不思議”を演出し、大阪フィルハーモニー交響楽団、ロイヤルチェンバーオーケストラとのコラボレーションでは寄席芸の“際物”的イメージを払拭。のこぎりを一つの楽器に進化させ、認知させた功績も大きい。</p>
芸術振興	甲斐 賢治	<p>甲斐賢治氏は映像表現にまつわる非営利活動を通じ、メディア・アートや市民によるメディア活動など、メディア・リテラシーの向上に尽力してきた。平成22年4月、せんだいメディアテーク・企画活動支援室長に就任。平成23年3月11日の東日本大震災後間もなく、その経験を活かし、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を開設、「市民の手で震災からの復興を記録、発信し、保存する」事業に取り組んだことは、高く評価できる。</p>
評論等	佐藤 守弘	<p>美術書から漏れた視覚文化を対象にし、近代的風景の出現を鮮やかに捉えた。たとえば泥絵は、人物も情感も季節も入れることなく「ハードとしての都市」を客観的にパノラマで描いている。浮世絵風景画を通じて「日本的」とされたものは、ことごとく崩れる。他にも京都や山村の見せ方など、「場所」が近代でどのように演出されたかを指摘しており、そのたびに「作られた日本」が浮かび上がってくる。著者はメディア状況や社会を同時に論じ、風景が見る側の文化しだいで変転することを証明した。大胆な仮説と精緻な論証を兼ね備えた優れた論考であり、今後の活躍を大いに期待できる。</p>
メディア芸術	長井 龍雪	<p>テレビアニメ作品は劇場用作品とは制作費などが異なるために、単純に比較するとテレビアニメが不利になることが多い。しかし、「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」は「めんま」の成仏(別れ)に向けて様々な人間模様を積み上げていくことで、最終回に向けて徐々に盛り上げていくという、テレビアニメならではのエンターテインメントを完成させている。声優陣も「声優アワード」受賞者をなれば、高いレベルの演出を感じさせた。日本のアニメ界を背負う才能”みーつけた!”。</p>

平成23年度(第62回)芸術選奨
選考経過

平成23年度(第62回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>古典芸能から現代劇の広い分野を通じて、選考審査員・推薦委員双方から、文部科学大臣賞には16名、新人賞には17名が候補として挙げられた。第一次選考審査会では、7名の審査員により昨年1年間の候補者の業績について、評価・議論を交わした結果、文部科学大臣賞候補としては5名(演出家1名、俳優4名)、新人賞は4名(劇作・演出家1名、俳優3名)に絞ることとなった。第二次選考審査会では、文部科学大臣賞には演出家の栗山民也氏の今年度の実績、どの作品においても安定した優れた演出の力量が高く評価され、続いて、俳優4氏の実績を個別に吟味した結果、又五郎襲名での力強い演技、義太夫狂言における見事な台詞術を見せた歌舞伎俳優・三代目中村又五郎氏に決まった。また、新人賞はフランス現代戯曲作品の舞台で知的な表現に成功した今井朋彦氏を受賞者とすることにした。</p>
映画	<p>映画部門では選考審査員と推薦委員から推された候補者は大臣賞10名、新人賞11名であった。第一次選考審査会ではこれらの推薦作品のうちから、大臣賞7名、新人賞7名に絞り込まれた。内訳は大臣賞では監督6名、プロデューサー1名、新人賞では、監督が5名、俳優が2名であった。近年、映画部門では、商業映画からドキュメンタリー映画まで幅広い作品が候補になるが、今年もその傾向が見られた。それだけ映画のジャンルが多彩になり、さまざまな映画スタイルが登場する時代を象徴しているのかもしれない。今年の特徴は、プロデューサーの重要性が各審査委員から強調されたことである。第二次選考審査会ではその流れを反映して、「一枚のハガキ」が慎重に審議され、その結果、出席者全員からの推挙でプロデューサー新藤次郎氏が選出された。残る一人については、「八日目の蟬」、「聯合艦隊司令長官山本五十六」と話題作を手堅く描いた成島出氏の仕事ぶりが評価された。新人賞は2者を中心に、評価が分かれたが、対象となった父親の魅力が大きく、ドキュメンタリーの素材の魅力を引き出した「エンディングノート」の砂田麻美氏に決定した。</p>
音楽	<p>本年度、選考審査員および推薦委員から推薦された候補者は、大臣賞11名、新人賞15名であった。第一次選考審査会では、全候補者について本年度の活動とこれまでの活動歴、また表現の方向性と技術的な問題点などを慎重に吟味し、大臣賞候補を4名、新人賞候補を4名に絞り込んだ。そして第二次選考審査会では、贈賞のタイミングや社会的影響なども考慮しつつ活発な討議を重ねた。その結果、山田流箏曲家の亀山香能氏とギター奏者の福田進一氏を大臣賞に、ピアニストの河村尚子氏を新人賞に決定した。3氏とも各分野において、卓越した音楽性をもって着実かつ独創的な演奏活動を展開してこられたが、特にこの1年間の活動で、自らの進むべき道を見定め、目覚ましい成果を上げられたことが高く評価された。なお候補者の中には、すでに受賞されていてもおかない実力と業績を備えた音楽家や、今後も推薦を受ける可能性が高い音楽家も含まれていた。次年度に期待が寄せられる人材が多かったことを付記しておきたい。</p>
舞踊	<p>文部科学大臣賞候補9名、同新人賞候補13名が並んだ。第一次選考審査会では、まず各候補者の業績について、選考審査員同士が意見を交換し、今年度の舞踊界の動向についての大きな認識を共有した。その過程で、大臣賞候補を4名、新人賞候補を4名に絞り込んだ。第二次選考審査会は、今年度の洋舞、邦舞の公演状況に鑑み舞踊界全体に目の行き届いた大臣賞、新人賞の選出を目指すことを申し合わせ、両賞の選考を同時に進めることとした。まず新国立劇場で、昨年の文部科学大臣賞受賞者の中村恩恵氏と共に「Shakespeare THE SONNETS」を踊り、構成・演出も担当した首藤康之氏が多くの支持を集めた。次いで花柳寿楽舞踊会における「夢殿」を始め、多くの舞台上高い表現力を示した花柳寿楽氏の安定した能力を評価し、首藤氏、花柳氏の両名を文部科学大臣賞に決定した。新人賞は、新国立劇場バレエ団公演において新作「パゴダの王子」の重要な脇役を好演した湯川麻美子氏を選出した。彼女には日本バレエ界における、現場のリーダー的な働きも期待される意見があったことを付記しておきたい。</p>

平成23年度(第62回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
文学	<p>文学部門の選考審査員ならびに推薦委員によって推された候補者は、大臣賞11名、新人賞11名と多数であった。第一次選考審査会の席上において、個々の作品について検討を重ねた結果、大臣賞の候補として5名(小説家3名、歌人1名、詩人1名)を第二次選考審査会の対象とすることを決めた。討議の過程において、「文学評論」も本部門で採択すべきとの意見が出たことを特記しておきたい。第二次選考審査会では、まず大臣賞に相応しい小説のジャンルから討議をはじめめるが、一作に絞るのが難航した。熟慮の結果、小池真理子氏の「無花果の森」を推挙するに至り、キャラクターの作り方とその歯切れのよい文体が評価された。一方、韻文については、藤井貞和氏の「春楡の木」が、現代詩の難解性を克服し、人間の生存を問う新しい模索が目された。散文系の委員たちからも賛同を得るものとなった。新人賞については、候補として5名(歌人2名、詩人1名、小説家1名)が論議の対象となったが、梅内美華子氏の歌集「エクウス」の傑出した詩的感受性に、審査員の全員が首肯する運びとなった。</p>
美術	<p>美術部門において選考審査員、推薦委員から挙げられた候補者は、大臣賞が18名、また新人賞は昨年を大きく上まわって18名であった。例年のことながら、本部門は関連領域が多岐にわたるため、慎重な審議を行い、第一次選考審査会の段階では大臣賞候補者10名、新人賞候補者8名に絞りこまれた。本年度の第二次選考審査会を通じて印象的だったのは、造形表現といえども昨年3月11日の東日本大震災の悲劇を抜きにしては何も語れないという共通認識を、列席の審査員諸氏が共有していたと思われたことであった。大臣賞には写真家としてこの大きな課題に正面から取り組んだ畠山直哉氏がまず決定し、残る1名について審議をおこなった結果、評価が二分され、2名が有力候補となった。この後、さらに突っ込んだ議論が白熱したが、どちらも甲乙つけがたい優れた成果であるとして、なかば膠着状態に陥ったものの、なお意見を積み重ねるうち、最終的には建築の坂茂氏を選出するに至った。新人賞についても、時間をかけた丁寧な議論を経て、大勢は4名の候補者に集約された後、更に討議を重ね、彫刻の小谷元彦氏が多くの支持を得て選出された。</p>
放送	<p>本年度の放送部門には、選考審査委員と推薦委員から、大臣賞12名、新人賞10名の候補者がノミネートされた。第一次選考審査会では、ここから候補者を大臣賞5名、新人賞6名に絞り込み、各候補者の作品を審査員全員で見直し、第二次選考審査会に臨んだ。対象となったのは、ドラマやドキュメンタリーのプロデューサー、ディレクター、脚本家、俳優である。この中で、評価対象となるドラマ2作品についてはディレクター、脚本家、俳優が、ドキュメンタリー1作品についてはプロデューサー、ディレクターがノミネートされた。このケースでの誰の力を一番に評価するのかを含めて、各人の作品評価を一つ一つ長時間にわたって重ねた。結果、大臣賞には、「死刑弁護人」(東海テレビ)のプロデューサー・阿武野勝彦氏がこれまでの実績も踏まえて選出された。当該作品を含めて、マスコミが忌避する題材と人に向かい合う志はドキュメンタリストの範を示して余りある。新人賞では、「それでも、生きてゆく」と「さよならぼくたちのようちえん」の脚本が評価され、坂元裕二氏が選出された。オリジナルなドラマを紡ぐ力と、内なる思いをセリフに導く才はすでに定評のあるところである。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門の選考審査員と推薦委員によって寄せられた候補者は、大臣賞が7名、新人賞が11名。大臣賞は演芸畑から落語が4名、音楽畑からは女優、俳優としても活躍する歌手が2名、グループ1組というノミネーションとなった。第一次選考審査会では各審査員から、それぞれが推薦する候補者および、推薦委員からの推薦理由を考慮しながら意見を述べて貰い、特に該当期間内の活動評価に重点を置いた。また新人賞では対象となる演目、作品への評価と共に、将来性に対する意見を聞き、その結果、大臣賞候補者3名、新人賞候補者を3名にまで絞って、二次選考の検討対象として残した。第二次選考審査会では、大臣賞候補について、各審査員が熟考した結果の意見を出し合い、それを踏まえて特に意見が割れることも無く、演芸畑から柳家権太楼氏、音楽畑から由起さおり氏の各1名ずつを決定。新人賞も同じく慎重に検討した上で、非常に珍しい「西洋ノギリ」で美しい音楽を奏でるサキタハヂメ氏を選出した。</p>

平成23年度(第62回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
芸術振興	<p>本年度は優れた候補が多かったが、特に、東日本大震災の復興における芸術活動において大きな貢献をされた方々の活動に感銘を受けた。最後まで残った候補は、これまでの抜きん出た実績だけでなく、芸術の力で東日本大震災復興に対する丁寧かつ独創的な活動により、特筆すべき方々ばかりであり、芸術選奨の趣旨に照らして、いずれも受賞に十分値する方ばかりであった。なかでも、大友良英氏は、新たな文化創造により福島の人々を勇気付け、世界の人々にもありのままの福島を理解してもらう活動を展開し、本年度の特筆すべき業績と評価され、大臣賞に決定した。また、新人賞には、せんだいメディアテークを拠点に、映像を駆使した芸術振興を進め、特に被災地の様々な映像を一般の人からも集めることで、防災や復興に寄与する活動を展開し、芸術振興の面からも、これを社会へ拡大し、社会の課題解決に寄与する点からも注目を集めた甲斐賢治氏に決定した。本年度の候補としては、大臣賞候補として17名、新人賞候補として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、全候補について、推薦理由、業績等が本部門の選考対象としてふさわしいかどうかを丁寧に審議した。その結果、大臣賞候補5名、新人賞候補4名に絞り込み、第二次選考審査会で審議の結果、前述の決定をしたものである。</p>
評論等	<p>本年度の評論等部門において選考対象となったのは、選考審査員、推薦委員、および他部門選考審査員からの推薦を合わせて、大臣賞15名、新人賞11名、計26名であった。内容は、文学、美術、音楽、演劇、映画、舞踊、メディア芸術など極めて多岐にわたり、それぞれ力のこもった作品が少なくなかった。第一次選考審査会においては、このうち大臣賞候補7名、新人賞候補6名を選び、次回までに審査員全員が候補作品を改めて検討することが決定された。第二次選考審査会においては、大臣賞に、幅広い知識と優れた鑑賞力に支えられた歌舞伎評論40年の成果を、大著「花とフォルム—転換する時代の歌舞伎評論」に纏め上げた中村哲郎氏、および革命と芸術表象と身体とを結びつけるという卓抜な視点から西洋、特にフランスの近代美術を読み解いた「フランス革命の身体表象—ジェンダーからみた200年の遺産」の著者、鈴木杜幾子氏の2名が選ばれた。また新人賞には、これまであまり論じられることのなかった江戸泥絵や横浜写真などの、丹念な調査と鋭い分析に基づいて新しい都市イメージ、自然景観を浮かび上がらせた「トポグラフィの日本近代—江戸泥絵・横浜写真・芸術写真」の著者、佐藤守弘氏が選出された。</p>
メディア芸術	<p>本年度のメディア芸術部門には選考審査委員、推薦委員から大臣賞には14名、新人賞には14名の推薦があり、第一次選考審査会で約半数に絞り込み、二次審査までの間に未見の作品について閲覧視聴できる機会を設けた。第二次選考審査会では各審査員の推薦理由を述べる形で選考を行ったが、多彩な分野からなっている本部門では各ジャンルを代表するような作家の作品が並び、両賞ともそれを徐々に絞り込んで、慎重な議論の上、決定した。大臣賞にはCM界での優れた作品で、数々の賞を受賞している佐藤雅彦氏の「0655」「2355」や「ピタゴラスイッチ」を始め、視覚的、内容的に斬新な表現をもって視聴者に受け入れられ、楽しんでいる数々の創作作品が高く評価され選ばれた。新人賞はノイタミナ枠で放送された「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」の監督・長井龍雪氏のオリジナルアニメが、ファンタジー的ながら、幼馴染みの死という過去を抱えた若者たちの淡い恋や罪の意識、絆や成長といった複雑な内容を見事に纏め、視聴者に支持されたことを評価した。</p>

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家、文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので、各部門2名以内（ただし、放送部門、芸術振興部門、メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家（個人）を対象とするもので、各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については、原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は、毎年、原則として1月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては、これまでの業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い、受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため、各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け、選考審査会に候補者を推薦する（芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家、専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員がそれぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、芸術振興部門については、他部門の選考審査員からも、推薦することができるものとする。また、評論等部門については、芸術振興部門を除く他部門の選考審査員から、それぞれの部門に係る「芸術評論家」または「文化芸術活動に著しい貢献のあった者」を推薦することができるものとする。
- (2) 推薦委員は、それぞれの部門にのみ推薦することができる。ただし、芸術振興部門については、他部門の推薦委員から推薦することができるものとする。
- (3) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成23年度(第62回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
近藤 瑞男	共立女子大学教授、演劇評論家	石橋 冠	フリー演出家
立花 恵子	演劇評論家	上滝 徹也	日本大学芸術学部教授
出口 逸平	大阪芸術大学教授	重延 浩	(株)テレビマンユニオン代表取締役会長・CEO
永井 多恵子	ジャーナリスト、公益財団法人せたがや文化財団副理事長	下重 暁子	作家、日本ペンクラブ副会長
西 哲生	能楽評論家	鶴橋 康夫	演出家
八月一日 教宏	演劇・芸能ライター	中島 文博	脚本家
水落 潔	演劇評論家、桜美林大学名誉教授	橋本 佳子	プロデューサー
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
大林 宣彦	映画作家	相羽 秋夫	大阪芸術大学教授、演芸評論家
種田 陽平	美術監督、ヨークデザイン代表取締役	児山 紀芳	音楽評論家
宮澤 誠一	日本大学芸術学部教授	中村 真規	芸能企画、評論家
村川 英	城西国際大学メディア学部教授、映像評論家	野村 雅昭	国立国語研究所名誉所員、早稲田大学名誉教授
横川 真顕	映画評論家、日本大学名誉教授	花井 伸夫	演芸評論家
渡辺 祥子	映画評論家	松枝 忠信	芸能評論家
		湯川 れい子	音楽評論家、作詞家
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
大谷 紀美子	学校法人相愛学園学园长・客員教授、邦楽評論家	磯山 雅	国立音楽大学教授
加納 マリ	武蔵野音楽大学講師	岩淵 潤子	慶應義塾大学政策・メディア研究科教授
吉川 周平	京都市立芸術大学名誉教授	衛 紀生	可児市文化創造センター館長兼劇場総監督
木村 俊光	桐朋学園大学教授、新国立劇場オペラ研修所長、声楽家	加藤 種男	アサヒビール芸術文化財団事務局長
長木 誠司	音楽評論家、東京大学教授	後藤 和子	埼玉大学大学院教授
中村 孝義	大阪音楽大学理事長、学長	柴田 英杞	滋賀県文化振興事業団副理事長
三宅 幸夫	慶應義塾大学名誉教授	根木 昭	昭和音楽大学教授
【舞踊部門】		【評論等部門】	
藍本 結井	舞踊評論家	荻田 清	梅花女子大学教授
桜井 多佳子	舞踊評論家	織田 紘二	独立行政法人日本芸術文化振興会顧問
佐々木 涼子	東京女子大学教授	高階 秀爾	大原美術館長
篠原 聖一	舞踊家、公益社団法人日本バレエ協会理事	田中 千世子	映画評論家・秋草学園短期大学教授
玉垣 直美	—	田中 優子	法政大学教授
丸茂 美恵子	日本大学芸術学部教授	樋口 隆一	明治学院大学教授
山野 博大	舞踊評論家	古井戸 秀夫	東京大学教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
桶谷 秀昭	文芸評論家、東京大学名誉教授	久保 雅一	小学館マルチメディア局チーフプロデューサー
黒井 千次	小説家、日本芸術院会員	源田 悦夫	九州大学大学院教授
篠 弘	日本文藝家協会理事長 日本現代詩歌文学館館長	鈴木 伸一	杉並アニメーションミュージアム館長
高樹 のぶ子	小説家	為ヶ谷 秀一	女子美術大学大学院教授
鷹羽 狩行	俳人、(社)俳人協会会長	ちばてつや	漫画家、文星芸術大学教授
高橋 順子	文筆業、詩人	中谷 日出	NHK解説委員解説主幹
		松谷 孝征	(株)手塚プロダクション代表取締役社長
【美術部門】			
飯沢 耕太郎	写真評論家		
内田 繁	インテリアデザイナー、桑沢デザイン研究所長		
逢坂 恵理子	横浜美術館長		
川口 直宣	泉屋博古館分館長		
小池 一子	クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授		
近藤 幸夫	慶應義塾大学准教授		
白石 和己	山梨県立美術館長		
鈴木 博之	青山学院大学教授		
宝木 範義	明星大学造形芸術学部特別教授		
松原 茂	根津美術館学芸部長		

※敬称略・部門内50音順

平成23年度(第62回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
池内 美奈子	新国立劇場演劇研究所ヘッドコーチ	天野 一夫	豊田市美術館チーフキュレーター
猪又 宏治	国立能楽堂企画制作課長	井手 洋一郎	府中市美術館長、東京純心女子大学教授
亀岡 典子	産経新聞大阪本社文化部編集委員	植松 由佳	国立国際美術館主任研究員
九鬼 葉子	演劇評論家、大阪芸術大学短期大学部准教授	遠藤 彰子	武蔵野美術大学造形美術学部油絵科主任教授
古城 十忍	(株)オフィスワン・ツー代表取締役社長、劇作家、演出家	大谷 省吾	東京国立近代美術館企画課主任研究員
塩崎 淳一郎	読売新聞東京本社文化部記者	小川 待子	陶芸家
高橋 敏夫	早稲田大学大学院文学部教授	笠嶋 忠幸	出光美術館学芸部学芸課長代理
高橋 豊	毎日新聞社社員編集委員、演劇評論家	金子 賢治	茨城県陶芸美術館長
長谷部 浩	演劇評論家、東京芸術大学教授	金子 隆一	写真史家、東京都写真美術館専門調査員
村上 湛	明星大学教授	小泉 晋弥	茨城大学教育学部教授
【映画部門】		南條 史生	森美術館長
明智 恵子	キネマ旬報編集長	野地 耕一郎	練馬区立美術館主任学芸員
内海 陽子	映画評論家	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸主査
勝田 友巳	毎日新聞社記者	古谷 誠章	早稲田大学教授
古賀 重樹	日本経済新聞社編集局文化部編集委員	松井 みどり	美術評論家
関口 裕子	元キネマ旬報編集長・映画ジャーナリスト	森山 明子	武蔵野美術大学教授
高橋 聡	大阪日日新聞社編集委員	吉中 充代	京都市美術館学芸課長補佐
田中 まこ	神戸フィルムオフィス代表	【放送部門】	
中嶋 清美	映像文化製作者連盟事務局長	浅野 加寿子	NHK放送博物館館長
野村 正昭	映画評論家	芦澤 務	日本大学芸術学部講師
森脇 清隆	京都府京都文化博物館学芸員	石飛 徳樹	朝日新聞記者
【音楽部門】		井上 由美子	脚本家
伊東 信宏	大阪大学大学院教授	音 好宏	上智大学教授
岡田 暁生	京都大学人文科学研究所准教授	砂川 浩慶	立教大学社会学部メディア社会学科准教授
小鍛治 邦隆	作曲家、東京芸術大学教授	鈴木 嘉一	読売新聞社東京本社編集委員
國土 潤一	声楽家、音楽評論家	原田 雅昭	雑誌・書籍編集者
薦田 治子	武蔵野音楽大学教授	東 多江子	脚本家、小説家
志村 哲	大阪芸術大学音楽学科教授	南川 泰三	作家、放送作家、日本放送作家協会理事、日本脚本連盟理事
谷垣内 和子	邦楽評論家、日本芸能実演家団体協議会職員	【大衆芸能部門】	
檜崎 洋子	武蔵野音楽大学教授	阿木 耀子	作詞家、女優、エッセイスト
沼野 雄司	桐朋学園大学准教授	生田 誠	芸能研究家
【舞踊部門】		上柴 とおる	音楽評論家
		香取 良彦	洗足学園音楽大学教授
福田 奈緒美	舞踊評論家、昭和音楽大学准教授	川崎 浩	毎日新聞社学芸部編集委員
新藤 弘子	舞踊評論家	関谷 元子	音楽評論家
祐成 秀樹	読売新聞東京本社文化部記者	布目 英一	演芸研究家
鈴木 英一	聖学院大学講師、早稲田大学講師、演劇博物館研究員	松尾 美矢子	演芸ライター
高島 整子	元朝日新聞社企画委員(現シニアスタッフ)、当道音楽会理事	茂木 仁史	国立演芸場演芸課長
立木 燁子	舞踊評論家	油井 雅和	毎日新聞社記者
永田 宜子	新国立劇場運営財団研修主幹	【評論等部門】	
板東 亜矢子	演劇・舞踊記者	井上 章一	国際日本文化研究センター教授
村山 久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	鹿島 茂	明治大学国際日本学部教授
望月 辰夫	新国立劇場運営財団制作部舞踊チーフプロデューサー	加藤 典洋	早稲田大学国際教養学部教授、文芸評論家
【文学部門】		木下 直之	東京大学教授
稲葉 真弓	作家、詩人	菘 あつこ	舞踊ジャーナリスト
三枝 昂之	歌人	武田 潔	早稲田大学教授
島田 雅彦	法政大学国際文化学部教授、作家	中川 俊宏	武蔵野音楽大学教授
南木 佳士	作家、医師	水原 紫苑	歌人
沼野 充義	東京大学大学院教授	茂手木 潔子	有明教育芸術短期大学教授
蜂飼 耳	詩人、作家	渡辺 裕	東京大学大学院教授
林 あまり	歌人、演劇評論家	【メディア芸術部門】	
正木 ゆう子	俳人	石黒 敦彦	美術家、多摩美術大学・武蔵野美術大学非常勤講師
宮部 みゆき	作家	鈴木 裕	ゲームクリエイター、株式会社ワイエスネット代表取締役
村田 喜代子	作家	鈴木 芳雄	編集者、美術ジャーナリスト
		田中 秀幸	株式会社フレームグラフィックス代表取締役
		氷川 竜介	アニメーション評論家
		細萱 敦	東京工芸大学准教授
		水口 哲也	プロデューサー、ゲームクリエイター
		森山 朋絵	メディアアートキュレーター、東京都現代美術館学芸員
		横田 正夫	日本大学教授
		吉村 和真	京都精華大学マンガ学部准教授